慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	唐代詩人岑参の後世における評価の変遷とその過程
Sub Title	A reception history of Cen Shen the poet in the Tang dynasty
Author	栗栖, 瑛(Kurisu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.115, (2018. 12) ,p.31 (118)- 47 (102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01150001-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

唐代詩人岑参の後世における評価の変遷とその過程

栗栖　瑛

1　はじめに

岑参は生卒年、七一五年から七七〇年の詩人である。その人生は盛唐期と重なり、唐代詩人の二大巨頭とされる李白、杜甫とほぼ同時期に生きた詩人である。この詩人の経歴の内、特筆すべきは、やはり二度の出塞経験であろう。彼は、報国の志や没落していた岑家の再興への願いから来る出世への渇望を胸に、節度使の幕僚として、七四九年から七五一年と七五四年から七五七年の二期間にわたって、それぞれ塞外の地にある安西都護府と北庭都護府に赴いた。塞外勤務の結果は、あまり芳しくはなかったものの、この二度に渡る西域行の間に生み出された、異国の風景風物や辺境地帯での戦乱を主題とする一連の詩は、後世、「辺塞詩」という分類に組み込まれ、岑参は「辺塞詩」の名手として、中国文学史においてその名を輝かせることとなる。そして、それと対応するかのように、従来の岑参詩研究では、その研究対象として、彼の辺塞詩に対する研究が大半を占める。また、それらの研究では必ず、岑参詩に対する評語「奇」についても言及される。この「奇」という評語の嚆矢となったのは、岑参と同時代に生きた殷璠の『河岳英霊集』における「参詩語奇体峻、意亦奇造」という評価

であるが、実はこの記述は後述する通り、岑参の辺塞詩に向けて為されたものではない。今でこそ、岑参という詩人について語るとき、詩人、辺塞詩と「奇」とは三位一体であるかのように捉えられているが、そのような認識は、清代の沈徳潛が以下のように述べたことに端を発するというのが通説となっている。

参の詩能く奇語を作し、尤も辺塞に長ず。（参詩能作奇語、尤長於辺塞。）[一]

この通説、つまり、「奇」を含む、岑参に対する評価は、本来岑参の塞外での経験と関連するものではなかったが、その二つを積極的に結び付けようとしたのは、清・沈徳潛ではないか、ということを我が国で最も早く提唱したのは、中野美代子氏「岑参の塞外詩――その発想の一類型――」[二]である。また中野氏は、現在、中国文学史において常識となっているように、岑参といえば、「塞外詩人の代表」であるという考え方も、沈徳潛に端を発するのではないかという指摘をしている。

中国においても、岑参の詩人としての地位の変遷に注目した同様の研究が既に為されている。陳暁紅氏は特にその分野での功績が大きい。「試論岑参〝辺塞〟詩人地位的確立」[三]では、岑参に関する後世の文学批評を追うことで、岑参の辺塞詩人としての地位が清人によって確立されたことを述べる。陳氏は、岑参の辺塞の作に直接言及した詩評が清代以降に増加することをその根拠の一つとしているが、その中でも沈徳潛による詩評に注目しており、それまでの岑参評で伝統的に継承されてきた「奇」という評価と、辺塞を題材とした詩に長けていることの二点に同時に言及したものとして注目に値するとしている。[四]

以上に代表される研究によって、岑参の辺塞詩人としての地位が確立するのは清代以降であるということ、そして、「奇」という評価が辺塞詩人としての一面と結び付けられたのも沈徳潛以降のことであるということが示されている。本論文では、これらを踏まえて、清代に岑参の「奇」なる辺塞詩人像が確立するまでには、どのような詩人像の変遷があったのか、そして、如何なる過程を経て、「奇」と辺塞詩人としての一面とが合流していくのかということを、「奇」の周辺の情報から明らかにすることを目的とする。

2　隠逸・山水詩人としての評価の確立

冒頭でも述べた通り、岑参は当初から辺塞詩人として評価されていたわけではない。その評価の実態について、順に確認していく必要があるだろう。最初かつ最重要と目される批評が、岑参と同時代の文人である殷璠によって為された以下の批評である。

参の詩 語は奇にして体は峻、意も亦た奇の造りなり。長風 白茅を吹き、野火 枯桑を焼くの如きに至りては逸と謂うべし。又た山風 空林を吹き、颯颯として人有るがごとしは宜しく幽致と称すべきなり。（参詩語奇体峻、意亦奇造。至如長風吹白茅、野火焼枯桑可謂逸矣。又山風吹空林、颯颯如有人宜称幽致也。[五]）

これは、岑参の詩に対して文学的批評として初めて「奇」という評価を与え、その後の岑参詩評の方向性を決定付けたという意味でも重要な批評であるが、「語」が「奇」で「意」もまた「奇」であること以外には、その対象、つまり岑参詩のどのような一面を指して、この評価を与えているのかということについて特に何も言及されていない。そこでまずは、どのような詩が収録されているのかを見ることで、この評価が詩人のどのような一面を対象としているのか、その方向性を絞って把握する必要がある。『河岳英霊集』は各詩人の詩に対する批評である品藻の後に詩を収録するという形式を採る。岑参品藻の後に続けて収められる岑参詩は以下の七首である。[六]

㈠「終南双峰草堂作」　㈡「終南雲際精舎尋法澄上人不遇帰高冠東潭石淙望秦嶺微雨作貽友人」
㈢「戯題関門」　㈣「観釣翁」　㈤「戎葵花歌」　㈥「偃師東与韓樽同詣景雲暉上人即事」　㈦「春夢」

これらの作品の個別の特徴もさることながら、全体として殷璠が岑参詩の如何なる点を高く評価し、「参詩語奇体峻、意亦奇造」という総評を下しているのか。殷璠が詩を採録した期間は、『河岳英霊集』序に「起甲寅、終癸巳」とあるのに従えば、開元二年（七一四）から天宝十二載（七五三）の凡そ四十年間である。開元二年は岑参誕生の一年前に当たり、天宝十二載は、岑参が一度目となる約二年半の塞外勤務から帰還し、長安で仕官を求めて活動していた時期に当たる。この間に

作られた詩から、殷璠によって選出されている七首の内、㈤「戎葵花歌」と㈦「春夢」を除く五首には、何らかの形で隠逸的傾向や山水への傾倒が認められる。終南の名を冠する㈠「終南双峰草堂作」と㈡「終南雲際精舎尋法澄上人不遇帰高冠東潭石淙望秦嶺微雨作貽友人」は共に隠逸的趣の濃い作となっている。前者は天宝十載に安西から長安に帰還して二年余り、終南山で半官半隠の生活を送っていた頃の作である。役人としての仕事を取り収めて、かつて生活を送っていたことのある馴染み深い山田に帰り、出世欲に駆られた心を平静にするために友人に暇を告げた（「斂跡帰山田、息心謝時輩[七]」）詩人が、終南の佳景の中で「平生の好み」に背くことなく、悠々と過ごす姿が描写される。後者は天宝三年の初仕官前に、終南山の高冠にて隠棲していた頃の作である。終南山系の雲際山の寺院に僧を訪ねて行くも会うことができなかった帰途に目にした、小雨に濡れ深緑に覆われた峰々とは対照的に雲がかかって姿を現さない終南山（「諸峯皆青翠、秦嶺独不開」）や、雲が晴れたのちに雲間から険しく聳えて姿を現した終南山の峰（「東南雲開処、突兀獼猴台」）とそこから流れ落ちる瀑布と水しぶきで白く見える空の様子（「崖口懸瀑流、半空白皚皚」）が詠い込まれる。そして、後漢時代の隠士張仲蔚を自身に比して、張仲蔚のもとを訪ねれば、その粗末な住居には蒿萊が生い茂っているだろう（「若訪張仲蔚、衡門満蒿萊」）という末尾の二句で締めくくられる。この詩は隠逸状態にある詩人の山水に対する視線と、かつての隠士への共感とも憧憬とも取れる末尾の二句によって、山水に暮らす隠者としての詩人像が浮かび上がる。また、これら二首ほど明確にではないが、仕官の志を実現することができずに隠逸生活への回帰を思わせる㈢「戯題関門」、逍遥して悠々自適に過ごす漁父を描写した㈣「観釣翁」、旅先からの帰途で通りかかったひと気のない山には煩わしいことが少ないのだと、厭世的態度が断片的に表れる㈥「偃師東与韓檀同詣景雲暉上人即事」も同様に隠逸的傾向を示している。

以上を踏まえると、殷璠が「奇」という評価を与える上で注目していた要素の一つは隠逸・山水の特徴を持った詩である可能性を指摘することができる。また、殷璠は岑参品藻中で摘句に対しても評価をしている。「長風吹白茅、野火焼枯桑」（「至大梁却寄匡城主人」詩）を、「逸」（抜きん出て優れている）、「山風吹空林、颯颯如有人」（「暮秋山行」詩）を「幽致」（奥深く静かな趣[八]）と評している。収録詩から見えてきたような岑参の隠逸・山水詩人としての一面は、これらの評価とも

矛盾しない。

3　後世における評価の変遷

前章では、岑参が同時代においては隠逸・山水詩人として評価されていた可能性を『河岳英霊集』中に収録される詩から確認した。岑参品藻には、今日まで続く岑参詩に対する評価「奇」も既に見られたが、この「奇」は、辺塞詩人としての評価をそもそも前提としていなかった。そこで本章では、「奇」なる「辺塞詩人」としての評価が確立するまでには一体如何なる過程が存在したのかを、主たる岑参評を時系列順に確認することで見ていく。

(1)　元代までにおける評価

岑参の死後、およそ三十年後のことである。岑参の子である佐公が京兆の杜確に父の詩集の整理を依頼し、岑参初の別集『岑嘉州詩』が成立した。今、杜確が本詩集に付した序より、岑参詩に対する評価に関する部分を抜粋する。

偏く史籍を覧み、尤も文を綴るに工なり。辞を属るには清を尚び、意を用うるには切を尚ぶ。其の得る所有るは、多く佳境に入り、迥拔孤秀にして、常情より出づ。一篇筆を絶つ毎に、則ち人人伝え写し、閭里士庶、戎夷蛮貊と雖も、諷誦吟習せざる莫し。（徧覧史籍、尤工綴文。属辞尚清、用意尚切、其有所得、多入佳境、迥拔孤秀、出於常情。毎一篇絶筆、則人人伝写、雖閭里士庶、戎夷蛮貊、莫不諷誦吟習焉。）

この評価の内、「迥拔孤秀、出於常情」とは、「高くそびえるように優れており、尋常の情意を超越している」ということを意味し、「奇」の要素は含まれていると捉えられる。しかし一方で、その評価の対象は、詩の表現面である「属辞」の「清」と構想などの内容面である「用意」の「切」とが作品の中にうまく結実したものであり、辺塞詩に限定されておらず、辺塞詩を念頭に置いたと読める表現にもなっていない。

南宋の厳羽も『滄浪詩話』詩評において、岑参詩に関して、「奇」と並んで後代に継承される評価を残している。

高岑の詩 悲壮、之を読めば人をして感慨せしむ。（高岑之詩悲壮、読之使人感慨。）

高岑という並称は、高適と岑参の二詩人を指している。高適は岑参と同時代の詩人であり、彼もまた塞外での勤務経験があることで知られている。この二人の詩人は実際の詩風の差異を無視して一括りにして論じられることも多いが、そのような認識の端緒は、おそらくはこの詩評にある。厳羽は、この高岑に共通する特徴として「悲壮」（悲哀に満ちた雄壮さ）と「感慨」を挙げる。この詩風に該当する作品と言うと、従軍経験に基づく「辺塞詩」を想起してしまうが、厳羽はこれらの評価が一体彼らのどのような作品及び作品群に対するものであるのか明示していないため、この記述のみから当時、既に二詩人が辺塞詩人として名声を得ていたと断言することはできない。しかしながら、この評価が従来の岑参詩評には見られなかった「悲壮」という新たな一面を発見し、後代の岑参詩評に多大なる影響を与えたことは確かであり、ここに厳羽の功績が認められる。

以上の時代を経て集積した岑参詩評を集大成し、かつ岑参詩に対するイメージを反映したものとして位置づけることが可能なのが、元代の辛文房『唐才子伝』中の記述である。今ここに岑参詩の評価に関する部分のみ抜粋する。

博く史籍を覧み、尤も文を綴るに工にして、詞を属（つづ）ること清尚、心を用いること良（やや）苦なり。詩調は尤も高く、唐興りてより此の作を見ること罕（まれ）なり。情を山水に放ち、故に常に逸念を懐き、奇の造（いた）り幽致、得る所は往往にして超抜孤秀、常情を度越す。高適と風骨頗る同じくし、之を読めば人をして慷慨懐感せしめ、篇は筆を絶つ毎に、人輒ち伝え味わう。（博覧史籍、尤工綴文、属詞清尚、用心良苦。詩調尤高、唐興罕見此作。放情山水、故常懐逸念、奇造幽致、所得往往超抜孤秀、度越常情。与高適風骨頗同、読之令人慷慨懐感、毎篇絶筆、人輒伝味。）

一見すると、以上に見てきたような前時代までの詩評に依拠し、論理的整合性を失わないように組み合わせただけに見える詩評だが、細かい差異に注目することによって、撰者である辛文房個人の岑参詩に対する認識及び詩人としての位置づけが浮かび上がってくる。とりわけ注目したいのは、「放情山水、故常懐逸念、奇造幽致、所得往往超抜孤秀、度越常情」の部分である。この箇所は、前半部分は「奇造」「幽致」という語に注目すると、『河岳英霊集』岑参品藻を思わせ、後半部分

は杜確の序中の表現をほぼそのまま受けており、以下のように解釈できる。「山水に情を寄せており、それ故に常に隠逸の考えを抱き、（その詩は）『奇』なる造りで『幽』なる趣を持ち、（そうした特徴が）うまく発揮された詩は、常々並外れて優れており、尋常の情意を超越している。」まず、山水への思いが存在し、それによって「逸念」が生じる。仕官への強い思いとそれが挫折に終わった時の隠棲生活への回帰願望は岑参の実作においても認められる特徴である。そして、「逸念」は直後の詩の特徴「奇造」「幽致」にも関係していくだろう。「奇造」「幽致」という評価のもととなったと思われる『河岳英霊集』岑参品藻の記述と比較すると、『河岳英霊集』では具体的な摘句に対する評価に過ぎなかった「幽致」が、『唐才子伝』に至って「奇造」に接近し同格に論じられるようになっている。以上のように理解するならば、「山水」「逸念」「奇造」「幽致」という語は一つのグループを形成しており、元代岑参詩評における「奇」は、「山水」や「隠逸」を前提として捉える必要があるという可能性を指摘できよう。これは、「奇」という評語を初めて用いた殷璠が、『河岳英霊集』の中で選出した七首の岑参詩の内、五首が隠逸的傾向や山水への傾倒を示していたこととも符合する。換言すれば、岑参と同時代においては収録詩の状況からおぼろげにしか捉えることができなかった隠逸・山水詩人としての岑参像が、元代に至って詩評の中に明記される形で表れたということである。加えて、過去の資料を節録する手法を採用している『唐才子伝』であるが、今見た箇所の中で「放情山水、故常懐逸念」の部分は、筆者が調査した限りでは、引用に基づくものではない。逆説的に言えば、この言葉は辛文房自身が編集に際して組み込んだものであり、彼が岑参を隠逸・山水詩人として評価していたことを示している。そして、「奇」と並んで「幽」もそのような岑参像を象徴的に表す評語として用いられているのである。なお、辛文房は、引用した箇所の直前の部分で岑参の辺塞行の経験に触れ、「参累て戎幕を佐け、鞍馬烽塵の間を往来すること十余載にして、征行離別の情を極め、城障塞堡、経行せざる無し」という指摘もしており、この時点で既に岑参の辺塞詩及び辺塞詩人としての一面への注目が存在していた可能性を示しているが、この箇所を含む一文は、あくまで岑参の特殊な経歴紹介に主眼が置かれており、直接、詩について言及するものではないだろう。したがって、やはり詩評全体の論調としては、今述べた通り、隠逸・山水詩人としての一面により重きを置いていると言えるだろう。このような岑参認識が、辛文房

のみならず当時の文人たちの一般認識であったかどうかは分からないが、少なくともそのような認識が存在したということは確かであり、岑参詩評を見ていく上では無視できないものである。

(2) 明代以降における評価

明代に入ると、岑参評は変質を遂げる。それが最も顕著に表れているのは、辺貢による「刻岑詩成題其後」である。今ここに関連する箇所のみ引用する。

殷璠嘉州の詩を評して曰く、語は逸にして体は俊、意は毎に奇に造る。而して厳滄浪則ち曰く、岑詩悲壮にして之を読めば人をして感慨せしむ。…（中略）…夫れ俊や、逸や、是れ太白の長なり。若し奇にして、又た悲且つ壮なるは、子美に非ざれば孰れか其れ之に当たらん。…（中略）…山風空林を吹き、颯颯として人有るが如しは斯れ悲壮にして奇なり。又た長風白茅を吹き、野火枯桑を焼くの句の如きは俊且つ逸ならざるかな。…（中略）…夫れ俊や、逸や、奇や、悲や、壮や、五者は李杜も兼ぬる能わざるなり。（殷璠評嘉州詩曰、語逸体俊、意毎造奇。而滄浪則云、岑詩悲壮読之令人感慨。…（中略）…夫俊也、逸也、是太白之長也。若奇焉、而又悲且壮焉、非子美孰其当之。…（中略）…山風吹空林、颯颯如有人、斯悲壮而奇矣。又如長風吹白茅、野火焼枯桑之句不俊且逸也乎哉。…（中略）…夫俊也、逸也、奇也、悲也、壮也、五者李杜弗能兼也。[11]）

ここで辺貢は、岑参の詩の特質について、『河岳英霊集』の言葉を引く形で、語が「逸」、体が「俊」、意が「奇」に造ると述べ、『滄浪詩話』の言葉を引く形で、その詩の「悲」「壮」を指摘している。この評価は、明代新刊本『岑嘉州詩集』の序として書かれたものであることから、やや過大評価のきらいがあるが、以上の五項目の内、「俊」「逸」は李白の長所であり、「奇」「悲」「壮」は杜甫の性質であると言い、岑参はこれらを兼ね備えた存在であると述べられている。本来、『河岳英霊集』では、「語」が「奇」、「体」が「峻」という評価であったものが、ここではそれぞれ、「逸」と「俊」へと変更されている。また同様に、摘句に対する評価についても重要な変更が見られる。『河岳英霊集』と記述の順序は前後するものの、

同じ詩句を引用して、「暮秋山行」の詩句「山風吹空林、颯颯如有人」には「悲壮にして奇」という評価を、「至大梁却寄匡城主人」の詩句「長風吹白茅、野火焼枯桑」には「俊且つ逸」という評価を与えている。冒頭で既に『河岳英霊集』を引用していることと、摘出された詩句と一部評価の重複を見る限り、『河岳英霊集』の記述を参考にしていると断定することができそうである。摘句の評価に対してなされた変更の内、転換点と見なしうるのは、本来「暮秋山行」に対する評価であった「幽致」が「悲壮」と「奇」に取って代わられているということである。岑参の格を引き上げるために、李白と杜甫に近づけようとした結果、元代辛文房の評価において、「奇」と同格に語られていた「幽」という側面は、二詩人との共通項ではないために捨て置かれた可能性が指摘できる。この変更が意味するのは、「幽致」という語で象徴的に表されていた「隠逸・山水詩人」としての岑参像が断絶したということである。辺貢による岑参評が適切であるかどうかはさておき、明代新刊本『岑嘉州詩集』に付されたこの後序の影響は大きかったに違いなく、事実、これより後の岑参評は、ここで示された「俊」「逸」「奇」「悲」「壮」の五項目が優勢となる。

では、明代以降、「奇」の周辺では、「俊」「逸」「悲」「壮」以外に、どのような語が用いられ、どのようなイメージが形成されていくのか、以下に見ていく。

明代の岑参評の大きな特徴の一つとして、記述の具体性が増すという点が挙げられる。換言すれば、一人の詩人を評価する時、その詩人のどのような点に対して評価を与えているのかということを記そうとする意識が認められるということである。明の徐献忠（一四九三～一五六九）『唐詩品』もその一つである。『唐詩品』は、太宗皇帝、玄宗皇帝を筆頭に、計八十三名の詩人について評価をしている。一部引用を挙げ、論を補強しているところもあるが、基本的には徐献忠自身の言葉で評価が為される。岑参は「嘉州刺史岑参」として立項されている。

嘉州詩は一に風骨を以て主と為し、故に体裁峻整にして、語も亦た奇に造り、意を持すること方に厳しく、竟に落韻すること鮮なし。五言古詩、子建以上従り、方に肩を聯ぬるに足る。古人は渾厚、嘉州は稍や瘦語多く、此れ其の迨ばざる所、亦た一間のみにして、其の他乃ち人意を尽さず。之を要するに孤峰天を挿し、霄漢を凌抜す。（嘉州詩一以風骨

為主、故体裁峻整、語亦造奇、持意方厳、竟鮮落韻。五言古詩、従子建以上、方足聯肩。古人渾厚、嘉州稍多瘦語、此其所不迨、亦一間耳、其他乃不尽人意。要之孤峰挿天、凌抜霄漢。[一三]）

冒頭部分は明らかに『河岳英霊集』の影響を受けており、岑参品藻がこの時代にどのように理解され、岑参という詩人がどのように評価されていたかを知るための手がかりとなりうる。まず、岑参の詩の根幹となっているのは、「風骨」つまり、詩に表される思想や言語を力強くするような気概である。その気概が、以下のような特徴を生み出している。まず、詩の風格が「峻整」（厳かで整っている）であり、内なる気概を表現するために、その語も尋常とは異なる「奇」なる造りをしている。さらに、体裁が厳かで整っていることから派生してか、詩人の創作の根本とも言える「意」を持つことにも厳格であると強調し、押韻を落とすこともまれであるという評価をしている。徐献忠の『河岳英霊集』に対する態度は、表記的な混同はあるものの、比較的忠実であり、「風骨」という言葉を明記することによって、その詩の厳しさと力強さを強調している。その特徴は、具体的に五言古詩を例として語られる。岑参の五言古詩は曹植とも肩を並べるほどであり、古人の詩は「渾厚」、つまり、力強く深みがあり、岑参はやや及ばないものの、その差はほんのわずかであると高く評価している。そして徐献忠は、「孤峰挿天、凌抜霄漢」という、天を突きさす孤峰が天空をも凌駕しているという鮮烈なイメージによって、岑参詩の厳格さ、力強さを更に強調する。この鮮やかに描かれたイメージは、明代において岑参詩評に多用されるようになる「けわしい」「力強い」というイメージを最も具体的に示したものであると指摘することができる。同じく『河岳英霊集』を引用した辛文房との着眼点の違いは明らかだろう。『唐才子伝』も風骨に言及しているのだが、その「けわしさ」や「力強さ」を強調することはなかった。以下に続けて挙げる岑参評には、この急峻な峰のイメージ及びそれに類するイメージが多分に反映されている。

王世貞（一五二六～一五九〇）は『芸苑巵言』巻四において、以下のように述べる。

高岑は一時、上下し易からず。岑の気骨は達夫の適上たるに如かずして、婉縟は之を過ぐ。選体は時時古に入り、岑は尤も陟健、歌行は磊落奇俊。高は一起一伏、之を取るのみにして、尤も正宗たり。（高岑一時、不易上下。岑気骨不

如達夫適上、而婉縟過之。選体時時入古、岑尤陟健、歌行磊落奇俊。高一起一伏、[一四]取是而已、尤為正宗。[一五]）

岑参と高適とでは、すぐには甲乙つけがたいとした上で両者の特徴について論じ、最終的に高適に軍配を上げている。岑参の気骨は高適には及ばず、文辞の華美では高適を超えて過度である。文選風の古詩は常に古人の詩と一致しており、岑参はとりわけ「陟健」であるが、歌行体は「磊落奇俊」である。高適は、「一起一伏」であり、これを学び取るだけで極めて正統派である。「陟健」という語は、王世貞に至って初出である。「陟」の字義は、「高所に登る」であるが、単に「高い」とする用例も確認できる。「健」という語と組み合わされることで、「けわしく力強い」という意味となる。この「陟健」という一語は叢書集成本『全唐詩説』では「陡健」に作る。「陡」も「けわしく切り立つ」様子を表す語であり、意味の上で大きな差異はないものと思われる。ここでも、五言詩を中心とする文選風の古詩に対して、「けわしい」というイメージが与えられている。

続けて歌行体に対してなされる「磊落奇俊」という評価は、「磊落」と「奇俊」が一つの語を形成しているとみなすと、他に用例がなく、意味を断定しにくい。そこで、高適の歌行の特徴である「一起一伏」から考えてみたい。王世貞は、同じく『芸苑巵言』巻一の中で、歌行体について以下のように述べる。

歌行に三難有り、起調一なり、転節二なり、収節三なり。惟うに収尤も難しと為す。平調、舒徐綿麗を作すがごときは、結は須らく雅詞を為し、不足せしむる勿く、一唱三歎の意有らしむべし。奔騰洶湧し、駆突して来たるは、須らく一截して便ち住め、有餘を留むる勿かるべし。中に奇語を作し、人魄を峻奪するは、須らく上下脈をして相い顧み、一起一伏、一頓一挫、力有りて跡無からしむべし、方に篇法を成す。此れ是れ秘密大蔵印可の妙なり。（歌行有三難、起調一也、転節二也、収節三也。惟収為尤難。如作平調、舒徐綿麗者、結須為雅詞、勿使不足、令有一唱三歎意。奔騰洶湧、駆突而来者、須一截便住、勿留有餘。中作奇語、峻奪人魄者、須令上下脈相顧、一起一伏、一頓一挫、有力無跡、方成篇法。此是秘密大蔵印可之妙。[一六]）

これを要すれば、「一起一伏」とは、「起」と「伏」とが一対一の対応をしており、変化に富むと同時に、一篇の詩の中で

バランスの取れた状態のことである。すなわち、部分的な特徴を、それと逆方向もしくは全体をまとめ調和させるような特徴を併用することによって、一篇全体の纏まりが保持された状態である。この「一起一伏」こそ、王世貞が、高適を岑参よりも優れているという判断を下す要因となっていると見なすことができる。高適の歌行体の特徴を以上のように捉えると、それと対比される岑参の「磊落奇俊」とは決して全面的な褒辞ではないということが分かる。「磊落奇俊」とは、言わば一つの方向に傾きすぎた過度な「起」であり、それを中和するような「伏」を伴っていないことから、高適には及ばないとされるのである。五言古詩に対して「陟健」というけわしさを強調する評価をしていること、そして高適の歌行体に対しても「一起一伏」という高低の差を用いた視覚情報に依存した評価をしていることを踏まえると、「磊落奇俊」という評価にも、「磊落」という語によって喚起されるような「高大さ」や「壮大さ」がイメージとして込められている可能性を指摘することができる。そして、このイメージは、既に見た徐献忠『唐詩品』の記述から始まる、急峻な峰のイメージに象徴されるような「けわしさ」や「力強さ」とも矛盾するものではないだろう。評価の褒貶にかかわらず、『芸苑巵言』における岑参詩評には、五言古詩に対しては「陟健」という語によって「けわしさ」「力強さ」が、歌行体に対しては「磊落奇俊」という表現によって、「高大さ」「壮大さ」がイメージとして付与されていると読むことができる。

続けて、胡応麟（一五五一～一六〇二）の『詩薮』は、内編六巻と外編六巻、雑編六巻、続編二巻から成る体系的著述である。詩体別に巻を立てた内編六巻のうち、五言古詩について論じた第二巻の中で、これまでに類を見ない体系的著述に相応しく、従来の岑参詩評に用いられることの多かった評語を継承した評価をしている。引用中の筆者による傍線部はそれを示した箇所である。

常侍の五言古は、深婉有致たり、而れども格調音節は、時に参差有り。嘉州は清新奇逸、大いに是れ俊才にして、質力造詣は、皆な高の上に出づ。然れども高は黯淡の内に、古意猶お存す。岑は英発の中に、唐体大いに著わる。（常侍五言古、深婉有致、而格調音節、時有参差。嘉州清新奇逸、大是俊才、質力造詣、皆出高上。然高黯淡之内、古意猶存。岑英発之中、唐体大著。）[七]

高の気骨は嘉州に逮ばず、孟の材具は遠く摩詰に輸し、然れども並駆するは、高岑は悲壮を宗と為し、王孟は閑澹を自ら得、其の格調一なればなり。（高気骨不逮嘉州、孟材具遠輸摩詰、然並駆者、高岑悲壮為宗、王孟閑澹自得、其格調一也。[一八]）

ここに挙げた二か所においても、岑参という詩人は高適との比較を通して論じられることとなる。そして、次に示す部分では、従来岑参詩評に用いられることのなかった新たな語が提示されている。

高岑は並びて起語に工にして、岑は尤も奇峭なり。然れども之を宣城に擬するは、格愈々下る。（高岑並工起語、岑尤奇峭。然擬之宣城、格愈下矣。[一九]）

胡応麟は、高適と岑参は共に「起語」の技術に秀でており、とりわけ岑参は「奇峭」であると評している。[二〇] この「峭」という一字は、「峻」「陟」（「陡」）から繋がる系譜を想像させる。「起語」とは、詩の立ち上がりを指す。この「起語」に巧みであることと、「奇峭」との間に、どのような関係があるかは定かではないが、この「奇」と組み合わせて用いられる「峭」もまた、「けわしさ」を原義とし、急峻なイメージが反映され、その筆力の強さを示しているだろう。[二一] 高適と岑参の違いとして、胡応麟は、気骨の差を挙げていたことから、岑参が起語において、とりわけけわしく力強いのは、その気骨が人並みではないことに起因するのかもしれない。

本節の最後に、「奇」と辺塞詩との関係に迫る記述として、明末清初の毛先舒（一六二〇～一六八八）の『詩弁坻』巻三を見ておきたい。ここにおいて「奇」は、一部の作品に限定されてはいるものの、辺塞詩と明確に結び付けて論じられるようになる。

嘉州の輪台諸作、奇姿傑出して、風骨渾勁、琢句用意、倶に精思を極め、殆ど子美、達夫の及ぶ所に非ず。（嘉州輪台諸作、奇姿傑出、而風骨渾勁、琢句用意、倶極精思、殆非子美、達夫所及。[二二]）

ここまでは、「奇」という評価が為される時、その対象は五言古詩や七言歌行体という広い範囲が対象とされてきたが、毛先舒に至って、「輪台諸作」という、より限定した範囲での記述となっており、それに対して、「奇姿傑出」という評価が

為されている。また、「輪台諸作」とは、詩中に岑参の二度目の西域勤務地である輪台が登場する詩を指している可能性がある。岑参の辺塞詩には、詩形を問わず、輪台が詩語として度々登場するが、その中には「白雪歌送武判官帰京」「輪台歌奉送封大夫出師西征」「走馬川行奉送出師西征」など辺塞詩の代表作も含まれており、輪台とは正に岑参辺塞詩を象徴する詩語の一つであると言える。評価に着目すると、「傑出」にもそれまでの「けわしい」というイメージを彷彿とさせるような「高く聳える」という語義がある。「奇」なる姿が高く聳えるという画像的イメージは、「輪台諸作」という具体的な作品群に注目するのに伴って、明代以降、古詩や歌行体に対して用いられていた「峻」、「陟」（「陡」）、「峭」を具体的な形で表したものと捉えられそうである。また、本文ではそれに続いて「風骨渾勁」と述べ、ここまで見てきた岑参評における「奇」の周辺と同様、その気概と力強さに言及する表現が用いられている。

以上に述べた明代以降の岑参評の状況を整理すると、以下のように総括することができる。まずは、「奇」の周辺の語や描写についてである。「けわしさ」や「力強さ」及びそれらに類するイメージが継承されていくことに注目したい。徐献忠は「風骨」に言及し、「峻整」「孤峰挿天、凌抜霄漢」という語や描写によって「けわしさ」を強調している。王世貞は、「陟健」（「陡健」）という語で「けわしさ」と「力強さ」を、「磊落奇俊」という表現で「けわしさ」や「力強さ」にも通ずるような「高大さ」や「壮大さ」をイメージとして込めている。胡応麟は「奇峭」という語で、毛先舒は「奇姿傑出」「風骨」という表現と語で、それぞれ「けわしさ」と「力強さ」を強調している。これを踏まえて、それぞれの詩話の著者が何を対象としてこれらの語を用いたのかということを見てみると、徐献忠は五言古詩を、王世貞は文選風の古詩（「陟健」）と歌行体（「磊落奇俊」）を、胡応麟は五言古詩を、毛先舒は「輪台諸作」を対象としている。

このように整理してみると、「奇」の周辺で「けわしさ」や「力強さ」が言及される時、その対象は常に古体詩であり、より正確に言えば、それは五言古詩と七言歌行である。「奇」の周辺で「けわしさ」「力強さ」を強調する語が継承されていったことと、その対象が一貫して五言古詩及び、七言古詩の中でも七言歌行となっていることの間には何らかの関連がありそうである。それは、岑参の現存する五言古詩九十七首の中には当然、辺境地域に滞在中の作も少なからず含まれ、また、

岑参の七言歌行には辺塞詩の名作が多いとされるからである。しかし、それだけでは、ここで挙げた「けわしさ」や「力強さ」を強調する語が、辺塞詩から得たイメージであると断言することはできないという反論があって当然である。ただ、全く断言できないとしても、古体詩に対して、「けわしさ」や「力強さ」のイメージが一貫して継承されていったことは間違いない。後世の文人たちが岑参の古体詩に注目したことが、果たして岑参の辺塞詩人という側面を認識することとどれほど関わっているのかは定かではない。しかし、明末清初の毛先舒に至って、何らかのきっかけで岑参の辺塞詩の一部が注目された正にその時、それまで継承されてきた「けわしさ」「力強さ」に類するイメージは、容易に辺塞詩と結び付き、その結果、そうしたイメージを束ねていた「奇」という語も、辺塞詩と結び付けて捉えられるようになったということは指摘できるのではないか。つまり、後世の文人たちが岑参の古詩に注目することによって、（辺塞詩を対象としていたとは断言できないが、ともかく）「けわしさ」や「力強さ」というイメージを育み続け、ちょうど明末清初の毛先舒の頃にそれらのイメージが辺塞詩の一部と重ねあわされた結果、辺塞詩と「奇」とが結び付いたのではないかという過程である。そして、この過程を踏まえれば、従来、沈徳潜によって発見されたとされてきた辺塞詩人としての岑参と「奇」という評価との結び付きは、明代を通して既に相当程度準備されていたとすることができそうである。

4　おわりに

本論文では、岑参と同時代から明末清初までの岑参詩評における「奇」と、その周辺の用語を大雑把に辿ってきた。「奇」という評価は、元代までは寧ろ「隠逸」「山水」詩人として一面と結び付けられ、明代以降は、急峻な峰のイメージを反映しているかのような、詩風の「けわしさ」や「力強さ」と結び付けられることが多いということが明らかになった。また、明代以降の「奇」の周辺の「けわしい」「力強い」というイメージが、岑参の「奇」と彼の辺塞詩人としての一面を結び付けるのに、一定の役割を果たしたのではないかということも指摘した。以上の分析によって、岑参という詩人を、従来よりも総合的に捉えた「奇」観を提供できたことに加え、従来研究されることの少なかった、「奇」なる「辺塞詩人」岑参とい

う詩人像の確立に至るまでの過程の一端を解明できたのではないかと考えている。

注

一　『唐詩別裁集』、上海古籍出版社、一九七九年、三十六頁。以下、本文と注における全ての引用は引用元の字体にかかわらず、全て新字体を用いる。

二　『日本中国文学報』第十二集、日本中国学会、一九六〇年。

三　『貴州教育学院学報』、貴州大学人文学院、二〇〇七年六月。

四　原文「其中、沈徳潜的評論最値得注意、他不但継承了伝統詩論、言岑詩之〝奇〟、而且首次明確講岑参擅長写辺塞題材的詩。」

五　李珍華・傅璇琮『河岳英霊集研究』、中華書局、一九九二年、一八七頁。本書は北京図書館所蔵の宋版二巻本を底本としている。

六　以下の作品名は、前掲『河岳英霊集研究』に依拠する。

七　以下、河岳英霊集収録詩の詩句の抜粋は、前掲『河岳英霊集研究』に基づく。

八　「幽致」は『漢語大詞典』第四巻、漢語大詞典出版社、一九八九年、四三七頁に立項。「幽雅別致：幽静雅致」と定義され、用例として『河岳英霊集』岑参品藻を引いている。今、この定義に則って解釈した。

九　四部叢刊本『岑嘉州集』（正徳十五年（一五二〇）刊）に冠せられたものを底本とし、一部補った。書き下しは、小川環樹『唐代の詩人―その伝記』、大修館書店、一九七五年、二四五頁から二四六頁を参考に、一部改変した。

一〇　何文煥輯『歴代詩話』下、中華書局、一九八一年、六九八頁。

一一　『五山版影印　唐才子伝』、汲古書院、一九七二年、六十五頁、六十六頁。

一二　四部叢刊本『岑嘉州集』に付されたものを底本とし、王雲五主編『華泉集』二（四庫全書珍本七集）所収、（商務印書館、一九七七年）の「刻岑詩成題其後」を参照した。引用中の中略は筆者による。

一三　周維徳集校『全明詩話』二所収、斉魯書社、二〇〇五年、一二八四頁。

一四　『弇州山人四部稿』本、叢書集成本『全唐詩説』では「伏」を「服」に作る。『弇州山人四部稿』のテキストは、明代論著叢刊

『弇州山人四部稿』（十三）、偉文図書出版社、一九七六年、六七一三頁を確認した。

一五　丁福保輯『歴代詩話続編』中所収、中華書局、一九八三年、一〇〇六頁。

一六　『歴代詩話続編』中、九六〇頁、九六一頁。

一七　『詩薮』上海古籍出版社、一九七九年、三十六頁。

一八　前掲『詩薮』、三十七頁。

一九　前掲『詩薮』、三十六頁。

二〇　胡応麟は「名家」（才能の偏った一方面だけにすぐれたもの）が得意とするものの一つとして、「奇峭」を挙げている。しかし、胡応麟は「奇峭」について特に説明を加えていない。原文は以下の通り。「清新、秀逸、沖遠、和平、流麗、精工、荘厳、奇峭、名家所擅、大家之所兼也。浩瀚、汪洋、錯綜、変幻、渾雄、豪宕、閎廓、沉深、大家所長、名家之所短也。」（外編巻四）」

二一　『漢語大詞典』第二巻、漢語大詞典出版社、一九八八年、一五二四頁の「奇峭」の項には、第一義として「謂山勢奇特峻峭」（山の姿が極めて高く険しいことを謂う）、第二義として「謂筆墨雄健而不同流俗」（文章が雄健で世俗と異なっていることを謂う）とある。ここは、詩について述べた箇所なので、第二義が適当であろう。

二三　郭紹虞編選・富寿蓀校点『清詩話続編』、上海古籍出版社、一九八三年、四十七頁。